

氏名	胡 杰
学位の種類	博士 (文学)
学位記番号	博甲第 222 号
学位授与の日付	2018 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文の題目	現代中国語疑問文の意味と論理
論文審査委員	主査 神奈川大学 教授 松 村 文 芳 副査 神奈川大学 教授 彭 国 躍 副査 神奈川大学 准教授 加 藤 宏 紀 副査 神田外語大学 准教授 布 川 雅 英 副査 麗澤大学 准教授 温 琳

## 【論文内容の要旨】

胡杰氏から提出の博士学位論文『現代中国語疑問文の意味と論理』について、まず「(1) 研究の目的」を述べ、第二に「(2) 論文の全体の構成」を提示し、最後に「(3) 各章の内容」を説明する。

### (1) 研究の目的

現代中国語の疑問文の最近の代表作は邵敬敏『現代漢語疑問句』（商務印書館 2014 年）がある。これに先行する研究も多いが、それらもすべて疑問文の統語的分析に重点をおいている。しかし、疑問文の本質的特性は「なぜその文が発せられたか」という根源的な動機を明らかにすることによって、より明確になるのである。この論文では朱德熙の『語法講義』の第十五章「疑問句和祈使句」に簡便に記述されて、詳述されていない疑問文の生成過程に注目し、その記述をより深く考察、発展させることにより現代中国語の疑問文の生成過程とそれの生み出す情報構造を体系的に解明することを目的としている。

### (2) 論文の全体の構成

まず第 1 章では「疑問文に対する先行研究」を「1.1 疑問文に対するマクロな研究」と「1.2 疑問文に対するミクロな研究」に区分して紹介した。第 2 章「研究方法」においては「2.1 命題論理と述語論理」と「2.2 モデルとモデル理論」について説明し、「2.3 本論における論理式」で本論文で用いる論理式を明らかにした。第 3 章の「現代中国語の当否疑問文の論理分析」では「3.1 当否疑問文の論理構造および情報構造」を明らかにし、さらに「3.2 “難道”を含む反語文について」で「主語前“難道”反語文」と「主語後“難道”反語文」の論理構造を詳述した。第 4 章「現代中国語の選択疑問文の論理分析」においては「4.1 選択疑問文の内部分類と各種類の選択疑問文の異同」、「4.2 疑問を表す要素について」と「4.3 選択疑問文の各並列項目成分の一致性」を論じた後に「4.4 選択疑問文の産出プロセスと論理構造」と「4.5 選択疑問文の情報構造」を明示している。

第 5 章「現代中国語の特定疑問文の論理分析」では特定疑問文を「5.1 “誰”を含む特定疑問文」、「5.2 “什么”を含む特定疑問文」、「5.3 “哪儿・哪”を含む特定疑問文」と「5.4 “怎

ム”を含む特定疑問文」に分けて論じた後に「5.5 特定疑問文の情報構造」を提示している。第6章「有限オートマトンによる疑問文の分析」では「6.1 有限オートマトンとは何か」、「6.2 状態遷移図とは何か」、「6.3 順序論理回路とは何か」で理論の詳細を説明した後に「6.4 当否疑問文の順序論理回路」と「6.5 選択疑問文の順序論理回路」を明らかにしている。第7章「述目構造における疑問形式」では「7.1 [疑問]を表す述目構造」と「[疑問]を表さない述目構造」を詳細に論じている。

### (3) 各章の内容

第1章では「1.1 疑問文に対するマクロな研究」の節を「1.1.1 疑問文の分類」と「1.1.2 疑問の表記、疑問の程度、疑問点および疑問機能の移行に関する研究」の二項に分けて詳しく紹介している。ついで「1.2 疑問文に対するミクロな研究」の節においては「1.2.1 当否疑問文に関する研究」、「1.2.2 選択疑問文に関する研究」、「1.2.3 特定疑問文に関する研究」と「1.2.4 方言の角度からの研究」の四項に分けて邵敬敏 2014 を中心に重要な先行研究の内容を提示している。

第2章の「研究方法」は「2.1 命題論理と述語論理」の節を「2.1.1 命題とは何か」、「2.1.2 命題論理」、「2.1.3 述語論理」と「2.1.4 構成性の原理」の項において明らかにし、さらに「2.2 モデルとモデル理論」の節において「2.2.1 論理言語 L2 と中国語の表現 C2 及びその翻訳規則」と「2.2.2 モデル」の項で実例を論じている。

第3章の「現代中国語の当否疑問文の論理分析」においてはさらに「3.1 当否疑問文の論理構造および情報構造」と「3.2 “難道”を含む反語文について」の2節に分け、前節をさらに「3.1.1 当否疑問文の産出プロセスとその論理構造」、「3.1.2 当否疑問文の情報構造」の2項に区分して詳論する。後節は「3.2.2 前提における“難道”の意味について」、「3.2.3 話題と評言」、「3.2.4 主語前“難道”反語文の前提の論理構造」と「3.2.5 主語後“難道”反語文の前提の論理構造」等の項に分けて論述している。

第4章の「現代中国語の選択疑問文の論理分析」ではまず「4.1 選択疑問文の内部分類と各種類の選択疑問文の異同」を論じた後「4.2 疑問を表す要素について」と「4.3 選択疑問文の各並列項目の成分の一致性」を明らかにする。しかる後に「4.4 選択疑問文の産出プロセスと論理構造」と「4.5 選択疑問文の情報構造」を明示している。

第5章の「現代中国語の特定疑問文の論理分析」は本論文の中核を構成する部分である。この章は「5.1 “誰”を含む特定疑問文」、「5.2 “什么”を含む特定疑問文」、「5.3 “哪儿・哪”を含む特定疑問文」と「5.4 “怎么”を含む特定疑問文」の四節で構成され、それぞれの特定疑問文の「産出プロセスと論理構造」が詳細に考察、論述されている。その上で「5.5 特定疑問文の情報構造」を実例を用いて明示している。

第6章の「有限オートマトンによる疑問文の分析」は前章までの論述とは異なる技法によって、これまで論じた疑問文の論理構造の正当性を説明している。ここでは「6.1 有限オートマトンとは何か」を説明した後に「6.2 状態遷移図とは何か」と「6.3 順序論理回路とは何か」でプッシュダウンオートマトンの概要を示し、さらに「6.4 当否疑問文の順序論理回路」と「6.5 選択疑問文の順序論理回路」で現代中国語の実例を用いた分析法を提示している。

第7章の「述目構造における疑問形式」においては朱德熙の『語法講義』が述べる「真の述詞性目的語動詞が疑問形式の目的語を持つとき、述目構造全体が[疑問]を表す場合と[疑問]を表わさない場合があるという記述に列挙された10個の用例を論理式を用いてその正当性を証明している。」「7.1 [疑問]を表す述目構造」と「7.2 [疑問]を表さない述目構造」がそれを詳述した節である。

## 【論文審査の結果の要旨】

胡杰氏の提出された本論文に対して実施した博士論文口頭試問委員会における審査委員各位の見解、評価及び当日行われた議論を総合して次に論文審査の結果を述べる。

第一に先行研究をよく渉猟しながらもそれが記述的手法を用いていることに満足せず、独自の観点である「疑問文の産出プロセスとその論理構造」を明らかにしたことは従来にない新しいアイデアの提出である。

第二に研究方法として従来行われることの多かった語用論の枠組みを用いず、モデル理論意味論を用いたことは本論文の目的に合致していると言える。

第三に反語副詞の“難道”が主語の前に生起する場合と主語の後ろに現れる場合の相違は従来明らかにされていなかったが、胡杰氏は孫菊粉 2007 の研究をヒントにその相違を反語文の前提に視点を置くことにより前者は話者が話題になるのに対して、後者は前提の従属節の主語が話題になっていることを明らかにしたことである。

第四に選択疑問文について一般選択疑問文と特殊選択疑問文に区分し、一般選択疑問文は二項目あるいはそれ以上の項目が存在し、特殊選択疑問文は二項目の選択項目のみが存在することを論域における集合の相違で説明できることを明らかにしたことである。

第五に「“誰”を含む疑問文」についてたとえば「誰是你們的班長？」という疑問文の産出のプロセスを「前提となる問答共有情報「 $\exists x$  [人' (x) & 是' (x, 你們的班長)]」に“誰”を代入することにより生まれる「問' ( $\phi$ ,  $\phi$ ,  $\exists x$  [誰' (x) & 是' (x, 你們的班長)]）」という論理式の成立」と捕らえることに成功したことである。

第六に“誰”以外の疑問詞を含む「“什么”を含む特定疑問文」、「“哪儿・哪”を含む特定疑問文」と「“怎么”を含む特定疑問文」についても細部の分析に工夫を加えつつ同様の手法で「疑問文の産出プロセス」を記述した後、さらに特定疑問文のそれぞれについてその「情報構造」を明らかにしたことである。

第七に「当否疑問文の順序論理回路」と「選択疑問文の順序論理回路」でその出力部分が疑問文それぞれの論理式の形成にかかわっていることを明らかにしていることである。ここでは細部の表記にさらなる工夫が必要であるとの指摘を受けたが、積極的な取り組みは評価できる。

第八に文の目的語の位置に埋め込まれた「疑問形式」がある場合にはそのまま[疑問]の意味を有する文を形成するが、他の場合にはその[疑問]の意が内包化されて[平叙]の意味を持つ文を作り上げることを論理式により詳細に説明することに成功したことである。

第九に胡杰氏のこの論文の大きな功績はそれまで語用論と統語論の領域で扱われていた現代中国語の疑問文の研究を形式意味論の視点から深く考察したことである。その考察は先行研究に範を求めることはできず独自に理論を作り上げる必要があった。その理論の中心は「現代中国語のすべての疑問文の産出プロセスと論理構造」とそれをもとに構築された「現代中国語疑問文の情報構造」である。

以上、胡杰氏の博士学位請求論文を詳細に審査し、博士学位論文口頭試問委員会における各審査委員の意見、評価を尊重し、また学位論文公聴会における胡杰氏の明確な研究発表と率直、活発な議論を踏まえて本論文の内容を精査した結果、胡杰氏のこの論文が博士（文学）の学位を受けるにふさわしいと認定した。